

教育における能力形成と有用性をめぐる時間論的考察

—— ジョルジュ・バタイユの「瞬間」概念に着目して

田 口 賢 太 郎

1. 本研究の目的と課題

本研究の目的は、20世紀フランスの思想家ジョルジュ・バタイユ (Bataille, Georges 1897-1962) の思索、とりわけ彼が著した数々の書物においてよく用いられている「瞬間 (instant)」という概念に注目し、時間という観点から彼の力概念についての基礎的考察を深めていくことにある。

様々な資格取得やソーシャル・スキルの向上などといった、諸能力の結晶化としての個人を育成することが教育においてしばしば目指される現今において、ある面において教育は有用な力を個人に付与する営みとして想定されているといえるだろう。例えば本田由紀は、「ハイパー・メリトクラシー」という言葉でもって、コミュニケーションの能力ですら、現代的に必要な能力としてメリトクラティックに組み込まれていることを指摘している¹⁾。このような有用性の範疇が人間個人の能力のうちに見いだされ、その範囲を押し広げている一方で、人間の生それ自体は、このような有用性の尺度に収まりきってしまうものではない、ということを誰しもが承知しているはずであろう。

確かに、現代の人間が生きていく上で欠かせない有用な諸能力を形成することは、教育の場においては必須のものであり、あえて問いにかけるまでもない急務のものでもある。しかし、そのみを教育に負わせるばかりであれば、教育は各個人を有用な人材として加工するというよりも広く視野をもつものではなくなるだろう。もし、その視野の及ぶ限りを超えた領域にもなお、有用性にのみ還元されるものではない力の領域があるとすれば、そのような力が生起している場合は、いかにして記述することができるであろうか。

本研究では、有用な力とそれに還元されることのない人間の生に深く根ざした力をともに関連付ける場の観測点として、時間という概念に注目する。と

いうのも、第一に教育はきわめて時間的なカテゴリを内蔵した営みであるからであり、さらに言うならば、人間の「力」の捉え方を根本的に変えるためには、まずはそこにおける人間の時間がどのように把握されているかを知ることが必要であるからである²⁾。第二に、バタイユの時間概念に着目することによって、教育における有用な力とそれを超越してゆく力との関わりあいを動的なダイナミズムにおいて捉えることを可能にすると考えられるからである。

教育における先行投資的な側面を考慮すれば、教育の只中において人は、教える者も学ぶ者も未来において獲得される価値に規定された現在という時間性を生きていることになる。こういった、近代的な時間意識に基づけられた教育の在り方、〈未来に従属し、現在が貧困になる〉というモチーフは、少なからずの教育的時間論に共有されているものでもある³⁾。1分の間もなく正確に区切られた時間割などを思い起こせばわかるように、有用な諸能力の付与という営みに要求されるのは、機能的に整備された時間であるだろう。逆にいえば、有用となりえないような力は、われわれが人間の有用な諸能力の開発育成に着眼する際の、その視覚領域の外に、すなわちある種の「時間の外」とでも言うべきところにこそ座していることになるだろう。バタイユは後者のような力を、人間的生の根源的な力ととらえ、それが生起しうる時間性を「瞬間」と表現した。

本研究では、バタイユの思索を手引きとすることで、人間の生そのものともいべき根源的な力と有用な力との関わりあいを描きとることを主眼とし、その方法として、両者の力を時間ならぬ「瞬間」と機能的時間の両者の動的絡み合いにおいて読み取ることを試みる。ついては、バタイユの『無神学大全 (La somme athéologique)』三部作、特に『内的体験 (L'Expérience intérieure)』、『ニーチェについて (Sur Nietzsche)』を主なテキストとして読解していく。

2. 力の蓄積と過剰、その時間性

バタイユの著作を注意深くひもといてみるならば、「瞬間」や「時間」、「未来」や「過去」といった時間的カテゴリに属するであろう語を認めることができる⁹⁾。先述したような、教育が時間の問題に直面したときに思い至る疑問と同様に、バタイユの思想のうちにも、未来に従属した現在への批判というモチーフが見出される。バタイユが批判するその時間性とは、「企て (projet)」と呼ばれる近代的人間の振る舞いに基づけられている。企てとは、休みなく従事することを余儀なくされる労働、またそれによって得た富の蓄積、さらに今より多くのものを得るための投資的な消費といった、今より後に訪れるであろう未来への気遣いから生じる、人間のあり方を支配する原理となっているものである。この企てという目的従属的な性格を帯びた時間性においてこそ有用な人間が成立している。したがって、機能的に整備された時間というものもまた、この時間性に含まれ、企てというものに基礎を置くものである。はじめに、その企てがもつ時間性について概観しておこう。

(1) 「企て」の時間性

バタイユの著作において随所に用いられる「企て (projet)」という語は、彼にとって重要なタームである⁹⁾。特に『内的体験』をはじめとする『無神学大全』においてはその記述の方々に拾い出すことが出来るし、またこれ以後に書かれた著作においても多くの箇所で見られる。というのも彼の批判は、ある意味でこの「企て」という一語に代表されるような近代的な生の様式に向けられていたからである。この「企て」について、バタイユが時間という観点から述べるところを引くとすれば、「実存のもっとあとへの延期である (C'est la remise de l'existence à plus tard)」⁹⁾ということになる。

バタイユによれば、企ては実存を後の時へと延期するような「逆説的時間における存在方式」⁷⁾だという。企てが己の未来への配慮に端を発するものである事からして、未来が現在のときを規定していることは容易に察することが出来るが、現在は未来からの規定を受けるのみではない。過去からも規定を受けることになる。逆説的というのは、そのためである。実存を後のときへと先延ばしすることは、一般

的に考えられるような時間の流れ方とは異なっており、極めて人間的な時間性であると捉えられているのである。すなわち、この企ての時間性において時間は、〈過去→現在→未来〉という流れ方ではなく、〈未来→過去→現在〉という流れ方をするものとして捉えられる。このことを具体的に把握するために農業を例にとろう。今後の自らの食い扶持がかかっている限りにおいて、農業は未来における生存への配慮に端を発するものである。農業従事者は、ある年の収穫をすべて食べ尽くすことをせずに、収穫の一部を、その種を保存しておくことによって、また再び農耕に取り組むべき季節が巡ってきたときに種を蒔くことが可能になる。翌年もまた収穫を得るという目的のためには、また種を蒔かねばならないし、そのためには種が手許にあるという状態になければならない。この農業のサイクルを繰り返し成立させていくためには、収穫物を食べ尽くすことを踏みとどまったということがその都度過去のものとなっておかねばならない。目的達成のために必要な条件を満たした状態にあること、具体的には収穫物の一部をとっておくという行為が過去のものとなつてこそ、手許に種が残るのである。またその他、手許の種を蒔くという段階においても、土地が耕されている、水利が整備されているといったことが、既に為されて済んだものとなっていなければならない。

このように、さまざまな過去となったものが未来への企ての条件を整える。企ての時間性においては、現在よりも後にくる時、つまり未来のために行動を起こすのであるが、それは過去とも無縁のものではない。ある未来の目的のための行動を支えるのは、現在に先立つとき、過去において他にはないのである⁹⁾。未来の目的から発し、過去の蓄積・実績を経て、現在において行動を起こすという時間の流れ方が、すなわち未来とともに過去からも規定をうけ、ようやく成立している現在の流れとして感じられる時間こそが企ての時間性である⁹⁾。

(2) 企ての時間性における力

それでは、企てと力はいかなる関係を取り結んでいるのか。すなわち、企ての時間性においては、力とはいかように捉えうるのか。先ほど確認したように、企てとは、未来への配慮に基づいたものであり、同時に過去からも規定を受けるものである。それは人間にしてみればいたって当り前の生き方であり、

この時間性は、人間の本質的な性格を規定するものであるし、われわれはそれを捨て去る事が出来ないだろう¹⁰⁾。とはいっても、バタイユにとってこの企ての時間性において看守される力は、決して力の本来的な姿が十全に現れたものだと考えられていなかった。より厳密には、この時間性において見取ることができる力とは、力の衰弱のときを示すものであったのである。

『ニーチェについて』の第2部は「頂点と衰退 (le sommet et le déclin)」と題されている。ここでのバタイユの主な関心は、通俗的道德 (morale vulgaire)——有用性に縛られたそれ——を転倒させることにあった¹¹⁾。バタイユは別の書物において「行動 (action) は、完全に企ての支配下にある」¹²⁾と述べているが、道徳的な振る舞いとて、その「行動」の例外ではないのである¹³⁾。

ここでいう頂点とは、力 (force) の過剰、横溢、度を越したエネルギーの消費を示すものであり、道徳的には善よりも悪に近いものとされている。これに対し、衰退の方は、憔悴、疲労に対応しており、存在を維持し富ます配慮に最高の価値を与えるものであり、通俗の道徳的規範は、この衰退の支配下において働くものとされている¹⁴⁾。以下に、バタイユの述べるところを引いておこう。

力が自分に欠乏しているとわれわれが感じる時、われわれが衰退しているとき、まさしくこのときに、われわれは優越せる善の名において消費の過剰 (les excès de dépense) を断罪する。若々しい興奮がわれわれを突き動かしている間は、われわれは、危険な浪費 (dilapidation) に、あらゆる類の向こう見ずな賭けへの投入に、同意する。けれども力 (force) がわれわれに欠乏するようなことになると、あるいはわれわれが力の限界に気づきはじめると、つまりわれわれが衰退しつつあると、われわれは、あらゆる類の財を獲得し蓄積することに、来るべき困難に備えて自らを富ますことに心を奪われる。われわれは行動するのである¹⁵⁾。

蓄積の必要が切迫しているとき、ここに有用性の道徳規範はその目を光らせており、無益な消費は断罪されるべき悪となる¹⁶⁾。その意味でこの消費は悪に近いもの、善にとっては不都合なものとなる¹⁷⁾。し

かし、実際のところこの過剰な力は善悪を超えて出ているものなのであって、これを悪とみなすのは力の衰退に見舞われた際のわれわれなのである。

企ての時間性において生きるわれわれのもとにある力が、バタイユにおいてはその欠乏状態としてみなされたことには、企ての性格が深く関わっている。目的に従って生きているとき、われわれの生は方向付けされ、大幅に制限を受けることになる。バタイユはこの状態を「断片的状態 (l'état fragmentaire)」¹⁸⁾と呼んでいる。これは、生けるわれわれの存在が全的にあるための力を持ちえず、生が制限された状態にとどまっていることを指すものである。この断片的状態にあってわれわれは、己の生きる時間の一瞬一瞬を有用なものとし、目的従属的な時間性において生きることになる¹⁹⁾。

では、そのような衰退の相において看取される力に対し、己の存在が全的に感得される過剰な力とは、いかように捉えられているものなのか。本研究の観点に従って言い換えると、過剰な力があふれる領域はいかなる時間性をもちうるのか。

(3) 力の横溢と瞬間

企ての時間性においては、われわれの存在は衰退としてイメージされ、力は欠乏状態にあると考えられていた。そこでは、われわれはその力を取り戻すかのように力の獲得を目指すようになる。企ての時間性においては、力は蓄えられる一方で、消費されることはない。たとえば、一般的に考えられるような消費は投資的側面を持つ。それは生活を脅かしたりするものではあり得ないし、百歩譲っても、生活に必要な範囲内で、生活を維持し、生命を保存するために行なわれるものである。それは企てに他ならず、エネルギーの消費とは似ても似つかぬものである。そのような消費とは性質を異にするエネルギーの消費、力の横溢を感得するには、どうあっても企て的であってはならないことになる。

よって、蓄積されていくいっぽうの力は、過剰な形で消費されねばならないものと考えられることになる。そこにおいてこそ、力の横溢をみることができ、従属的状态から解放され、生の全体性を取り戻す瞬間が得られるとバタイユは考えていた。ただし、それは時間にして束の間のできごとである。認識さえ覚束ない一瞬である。つまり、この過剰な力は企ての時間性のどこにも位置することはないのであ

る。この力は、未来からも過去からも規定を免れた現在の一点、言うなれば「瞬間 (instant)」において感得されることになる²⁰⁾。

3. 企ての時間性と瞬間が描く相克としての時間

これまで述べてきたことから、二つの対立が認められる。一方に力の衰退があり、他方に力が過剰となる頂点がある。すなわち、一方に企ての時間性があり、他方にその時間性を越え出る瞬間がある。

とはいえ、この二つの対立は、実際同じひとつの時間のもとにしか——われわれが生まれ死ぬまでのその間しか——現れ出することは出来ないはずである。だがまた、力の衰退と横溢が同時に起こりえないのと同じに、企ての時間性と瞬間の時間性が同時に、あるいは並列的にわれわれに感得されることはない、とも言うのだろうか。ひとつの時間のうちに二つの時間性がありうるのである。

バタイユは、時間は二つの仕方であれわれの中に流れ込んでくると述べている。そこでは賭けという行為の二面性に重ねあわせて捉えられている。一方は投機的な性格を持つものである。この賭けでは己の働き得たものが賭けられるが、未来の利益を目指すことに心を奪われたものであって、企ての性格を持つものである。他方は、儲けを度外視した賭けへの投入であり、この賭けでは自らを投げ出すことによって目的や利益を超えたものとなり、その点で、未来への配慮とは無縁なものになりうるものである²¹⁾。両者は同じ行為のようであるが、その性格は全く異なったものとなる。

前者においては、猛々しい力の流れはなく、その時間性も未来と過去に整流器のようにはさまれることで限定され、定められた目的へと流れるものとなる。それに対して後者では、目的を持たぬため力はあらゆる方向へと噴出し、その生の可能性は無限定なものとなる。つまり、断片的ではなく全的におのれの存在を感得することが出来るのである。しかし、その十全に生を味わう時間は持続しない。後者の時間性はあくまで瞬間と表すより他ないものなのである。瞬間が去ると再びわれわれは企ての時間性にしたがい、蓄積を目指すようにして生きざるを得ないのである。あたかも借金まみれのギャンブラーが必死に働いて金をかき集めねばならないように、常に

瞬間にとどまって生きることが出来ないのである。

私は次のことを否定できない。すなわち衰退は不可避なものであり、頂点自体がこのことを告げている、ということ。そして、頂点が死でない場合、頂点は自らのあとに衰退する必然性を残しておく、ということ。本質的に頂点とは、生が、極端な場合には、不可能になる。そういうところなのである。私は惜しみなく力を消費することによってはじめて頂点に到達する。到達するといっても、きわめてわずかな限りでのことなのだが。私は、一度消失した力を働いて取り戻すという条件でやっと、浪費する力を再び自由に持つようになる²²⁾。

瞬間の時間性に留まって生きられないのは、それが目的を持つことが許されず、したがって持続することもなく、というだけでなく、その瞬間において力が消費し尽くされるため、再び力の蓄積が余儀なくされるためでもあったのである。もし瞬間の生にとどまることが出来るとしたら、それはもはや神か動物でしかないだろう²³⁾。「人間」の生を支える時間性は両者にまたがっており、あるいは一方のみでは成立しない。この2つの時間性を生きる者こそが「人間」なのである。

4. 結語

本研究では、バタイユのテキストにそって、力を時間という観点から把握しようと試みてきた。一見、有用性に従うことのない力は、時間の範疇から追いやられているかのように見える。しかし、それはあくまで有用性の原理に基づく時間性に位置を占め得ないというだけのことである。

バタイユは、通俗的には豊かな力をつけるものであると考えられるような——学力もそうであるし、生きる力などもそうであるだろう——企ての時間性においては、むしろ「力の衰弱」を読み取り、力の欠乏ゆえにその蓄積が目指されていると考えた。それに対し、有用な時間性、企ての次元を越えるような瞬間においては、力の過剰な横溢を見て取っていた。このような時間の最中においてわれわれは個人として断片化されていない存在として生きている。そしてなにより重要であるのは、後者の時間性を持

ち上げ、前者を切って捨てるのではなく、この両者がわれわれに流れ込んでくる時間を生きることが、すなわち人間的生であるという点である。バタイユは何も、力の放出のみを重要視し、その蓄積を単純に切り捨てていたわけではない。

私は、道徳の規範を捨て去ることなど夢見てはいない。道徳の規範は、不可避な衰退に属している。われわれは絶えず衰退しているのだ。そしてわれわれを解体する欲望は、われわれの力が回復してはじめて再生する²⁴⁾。

瞬間のみを称え持ち上げるだけではわれわれの生きる時間は成り立たない。もちろん企ての時間性に生きるのみであってもわれわれの生は断片的になり、窮屈なものとなる。またさらに、バタイユのことはを引いておこう。「生は力の蓄積と喪失であり、平衡なくして生はありえず、またその平衡の絶えざる危機である²⁵⁾。」

バタイユにとって問題なのは、有用な力の要求がその喪失を圧倒的に凌駕しており、したがって企てが人間的生を広く覆ってしまい、瞬間の契機が失われてしまっている事態である。では、教育という営みのただ中にある教育者や子どもたち、それを取りまく人々の生について振り返ってみるとどうであろうか。教育においても依然として有用な力は求められてやまない。教育という営みのうちでも、バタイユが危惧してみせたように、人間の生は有用性に圧迫されているように見受けられる。有用な諸能力の要求は人間の生の維持とも関わるため、教育の領域からある程度これを退ける、というだけでは問題の解決にはならない。またさらに言えば、教育の営みのうちに「瞬間」の契機を見出すにはどうすればいいのかという問いへと進むだけでも不十分だろう。なぜなら、そのような態度は実質、「瞬間」という時間性を評価し、意味を与え、有用なものとして教育のうちに引き入れることに他ならないからである。よって教育という営みが人間のものである限り、教育という波頭を生じさせる大海にもぐることも、つまりもっとひろく人間のうちに、時間の捉え方を再考することが必要となる。企ての時間性と「瞬間」との関わり合いとしての人間の生の時間性を、さらに深く問い直すことが必要とされるだろう。この人間的時間性への問いをいっそう深めていくことを、今

後の課題として取り組みたい。

人間の成立を広く見渡すということに関して、実際、教育の場を有用性が席卷している現在では、人間の深みをどれだけ真摯に問うことができているであろうか。本研究がバタイユの思想に寄り添うことで目指したのは、教育の前景では火急性をもつように見える有用な能力の形成、これから一歩引いて、そのような有用性の要請も、また有用性の観点からは捉えがたい瞬間も含め、広く人間の全景を捉えることであった。バタイユの思想には、有用性の尺度で推し量られるのみに留まらないはずの人間性への深い洞察がある。有用性の原理に駆り立てられている現代の教育にとっては、バタイユの非有用な「企て」は真に求められる人間への問いとなるだろう。その問いが、現代的な教育においてどのようなプログラムを立ち上げることを可能にするのかは、稿を改めて検討したい。

注

- 1) 本田由紀『多元化する「能力」と日本社会—ハイパー・メリトクラシー化のなかで—』、NTT出版、2005年。
- 2) 例えば、アガンベンは「真正な革命の任務は単に《世界を変えること》ではなく、同時にそしてまずは《時間を変えること》だ」と述べている。(Giorgio Agamben: *Infanzia e storia : Distruzione dell'esperienza e origine della storia Nuova edizione accresciuta*, Giulio Einaudi editore S.p.A., 1978 e 2001, p.95. [上村忠男訳、『幼児期と歴史』、岩波書店、2007年、159頁。但し一部改訳。])「革命」という言葉からも明らかなように、アガンベンが「あらゆる文化はなによりもまず時間についてのある経験であり、そして新しい文化はこの時間経験の変化なしには不可能である」(ibid. [同上。但し一部改訳。])と述べる時、念頭に置かれているのは歴史概念の練磨である。だが、人間をある時代に見合う歴史的主体として育むことを教育のうちに読み込むならば、教育という営みもひとつの文化として、この言に重ね合わせて捉えることができるだろう。ただ、アガンベンの詳細な「時間」の読解は本稿の射程をはるかに超える壮大なものである。本稿はその時間の観念を捉えなおすという企図の重要性についてのみ共有する。
- 3) 例を挙げれば、以下の通りである。
新野貴則：「意味生成としての学びに関する一試論：教育における時間の問題と芸術教育の役割」『美術教育

学』第28号、2007年、293-305頁。

佐々木英和：『「自己実現」の教育論・学習論的意義の検討—時間論的視点からの一考察—』『東京大学教育学部紀要』第33巻、1993年、247-256頁。

白銀夏樹：「アドルノのBildung概念における時間の位相について—美的経験の瞬間と歴史の問題を中心に—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第3部 第50号、2001年、71-76頁。

白銀 夏樹：「人間形成における時間的連続性に関する一考察——時間意識をめぐるアドルノの思想を手がかりとして」、『近代教育フォーラム』第12号、2003年、211-223頁。

Roy, Kaustuv.: “An untimely intuition: adding a Bergsonian dimension to experience and education” in EDUCATIONAL THEORY, Vol. 55, Number 4, 2005, pp.442-459.

Mayes, Clifford.: “Teaching and Time: Foundations of a Temporal Pedagogy” in Teacher Education Quarterly, Volume 32, Number 2, Spring 2005, pp. 143-160

新野においては、学校における授業という時間が子どもたちを均質な時間に押し込めてしまうということが、メイズにおいては、アメリカにおける諸改革では、学校の時間把握の仕方がシステムエンジニア的であり、それ故充実さを欠くものとなるという点が問題として提示されている。また、佐々木は、過去も未来も忘却する瞬間が人間形成の重要な契機となると指摘し、ロイは、デュエーに代表される経験の捉え方とは異なる視座として、ベルグソンの時間・空間概念に依拠した新たな経験の捉え方を提示しようとする。これらの研究は大要、次のようにまとめることができる。ひとつは、近代的な時間意識に基づけられた教育の在り方(特に発達論)・充実した時間を欠いた状態に問題意識があるという点。もうひとつは、その解決策として、リニア的でない別様の時間の捉え方を提示するか、あるいは直線的な時間に充実を与える装置として、垂直の経験に示唆されるような特権的な時間様態(「瞬間」等)が提示されるという点である。

4) とりわけ『内的体験』、『ニーチェについて』などの著作においては随所に認めることができる。また、バタイユの思想を時間論的に読み解くということに関しては、和田の大きな功績がある。和田は、バタイユの思想がコジェーヴの歴史観との対決のなかで醸造されていったものである、という見取り図のもとに、バタイユの思想

の核心に「時間」概念があること、すなわちバタイユを「なによりもまず、〈時間の思想家〉として位置づけられるべき存在」(和田康、『歴史と瞬間——ジョルジュ・バタイユにおける時間思想の研究』、溪水社、2004年、12頁。)であると提示することに成功している。

5) バタイユは各所で当たり前のようにこの「企て (projet)」という語を用いるが、そこに込められている意味は通常使用されるような「計画・企画」といった意味合い以上のものである。また、この語は哲学的な文脈においては大きな意味をもち、ハイデガールの『存在と時間』において語られる「投企 (Entwurf)」の仏訳として流通している語でもある。サルトルはバタイユの「企て」という語を「実存主義者の言葉である」と指摘している (Sartre, Jean-Paul, 1947, p.156. [「新しい神秘家」清水徹訳、『シチュアション I 評論集 サルトル全集第11巻』、人文書院、1965年、138頁。])。ただ、その一方で、和田も指摘するように、バタイユが出席していた1933年から1939年にかけて行われたアレクサンドル・コジェーヴによる、パリの高等研究院でのヘーゲル哲学講義の影響も大きいと思われる (和田、2004年、36頁。)

6) *L'Expérience intérieure* (以下EIと表記), (*Œuvres complètes* (以下OCと表記), V, Paris: Gallimard, 1973, p. 59. [出口裕弘訳、『内的体験』、平凡社、1998年、115頁。])

7) *ibid.*

8) 和田は、バタイユの時間思想の源泉を、コジェーヴのヘーゲル解釈に見ているが、バタイユがヘーゲル哲学の知見を取り入れる際に、この人物から多大なる示唆を受けたことからしても、そのことは妥当だと思われる。そのコジェーヴとはといえば、ヘーゲルの全哲学を解釈する際にもっとも重要なテーゼとして「時間は人間であり、人間は時間である」(Kojève, Alexandre, *Introduction à La lecture de Hegel, leçons sur la phénoménologie de l'esprit, professées de 1933 à 1939 à l'École des Hautes-Études, réunies et publiées par Raymond Queneau*, Paris: Gallimard, 1947, p.370. [上妻精、今野雅方訳、『ヘーゲル読解入門：『精神現象学』を読む』、国文社、1987年、205頁。]) という文句を掲げている。また、コジェーヴの講義録における記述の中にも、本文中で述べたような人間の特殊な時間の流れ方についての記述を指摘することができる。「意識的、意志的な行動の時間こそが、未来のための企て (un Projet pour l'avenir) を、過去の認識から発し形成された企てを (lequel Projet est formé à partir de la

connaissance du passé) 現在において実現するものである。」(Kojève, 1947, p.369. [同書、202頁。])

- 9) このような時間構造を持つ企ての労働的なモデルに基づいた解釈から、矢野は教育の領域における発達論と企てとの相同性を見ている。一定の順序を備えた段階に従い、最終的な到達点へと上昇していくプロセスを持つ発達論は労働のプロセスそのものといってよい。「近代は労働の時代であり、資本主義であろうと社会主義であろうと『労働する人間』こそが『人間』のモデルをなしている。したがって、…『発達の論理』が労働のプロセスをモデルにして制作された人間の変容を捉える論理であるのは当然のことであった。つまり、『発達』という自己変容のプロセスと論理とは、労働によって世界を同化し、人間自身を人間化するプロセスと論理とを意味する。」(矢野智司、『自己変容という物語—生成・贈与・教育—』、金子書房、2000年、29頁。)
- 10) 「人間の本性は、それ自体として、未来への配慮を捨て去ることが出来ない。」(Sur Nietzsche (以下SNと表記)、OC,VI, p.54. [酒井健訳、『ニーチェについて』、現代思潮社、1992年、91-92頁。])
- 11) 『ニーチェについて』第2部「頂点と衰退」は、バタイユが通俗の道徳に対し彼独特の道徳観を打ち出した、1944年3月に行なわれた「罪に関する討論」の原稿がもととなっている。
- 12) EI, OC, V, p.59. [前掲書、115頁。]
- 13) 『ニーチェについて』においては、具体的には次のように述べられている。「もしも私の生が、理解可能な善のために——例えば都市国家のために、あるいは有益な目的のために——活動しているのならば、私の行為は、メリットとして報われることになるし、俗に道徳的とみなされることになる。そしてその理由からさらに私は、道徳に従って人殺しもするし、破壊行為もするだろう」(SN, OC, VI, p.50 [前掲書、84頁。]) ただし、これは通俗的に語られうる道徳のことを指している。また、『内的体験』においては、「道徳は利害に関わるものでしかなかったのだろうか」という疑義は呈されつつも、「道徳の次元は企ての次元だ」と言い切られている(EI, OC, V, p.158. [前掲書、311頁、但し一部改訳。])
- 14) SN, OC, VI, p.42. [前掲書、67頁。] また、道徳的には悪に近いとされる頂点に対し、衰退は善悪を含む道徳的規範そのものを従えているという幾分アンバランスな対称関係は、バタイユ独特の二元論を反映しているだろう。オリエの言葉を借りるならば、この二元論は、「一つの世界の内部で二つの原理を定立するのでは

なく、二つの世界を定立するのである」(Hollier, Denis.: «Le Matérialisme dualiste de Georges Bataille», in *Tel Quel*, n°25, Printemps 1966, p.44. [「ジョルジュ・バタイユの二元論的唯物論」門間広明訳、『水声通信』、第5巻3号、「特集ジョルジュ・バタイユ」、水声社、2009年8月、82頁。])一つの世界の内部における二つ原理の対立は、最終的には一つの体系をなすものであり、この二元論はそのような一体系をなす世界と、それら二つの原理があやふやで渾然一体となった世界の対立を描くものである。ここでの文脈に沿って言い換えるなら、すなわち善悪の対立軸が成立しうる道徳的世界と、悪に近い世界とである。

- 15) SN, OC, VI, p.55. [前掲書、92-93頁。]
- 16) 重ねて注意喚起しておくが、ここで言われている道徳規範とは、通俗的道徳のそれであり、何らかの有用性に隷属しているものである。本稿では筆を割くことが出来ないが、これに対してバタイユが志向していた道徳は、それ自身において価値を持ちうるような道徳、未来への配慮を打ち捨てた、悪に近い世界において実現できると考えられていた。(SN, OC, VI, p.50. [同、83-84頁。])
- 17) 「エネルギーの無秩序な消費は、…この存在の保存維持にとって、すなわちこの存在の善にとって、不都合である。」(SN, OC, VI, p.52. [同、87頁。])
- 18) 「人を、特殊な存在に変え、与えられた活動の領域内に閉じ込めてしまう行動への欲求、これこそ断片化(fragmentation)の原因である。行動とは、われわれの生の各瞬間を未来の明確な結果に従属させて、われわれの存在の総体性 (total de l'être) を抹殺するものなのである」(SN, OC, VI, p.17. [同、24頁。])
- 19) 「人間の断片的状態 (l'état fragmentaire) とは、つまるところ、目的を選択することと同じなのだ。…肝心なのは、はじめから彼が自分の存在を功利的に時間の中に組み入れる点だ。彼の生の各瞬間は有用になる。選択した目的に向かって前進するという可能性が彼には各瞬間ごと与えられている。結局、彼の時間は、この目的への進行ということになる(これこそ人が、通常、生きると呼んでいることなのだ)」(SN, OC, VI, p.18. [同、25頁。() は原文ママ。])
- 20) 「私は本書第2部で、頂点と衰退について語ったが、そのとき、頂点への配慮と未来への配慮を対立させていた。実際、頂点は現在時 (le temps présent) の中に含まれるものなのだ」(SN, OC, VI, p.167. [同、291頁。]) ここでいう現在時とは、それが未来への配慮と対立す

るものである限り、未来と過去に規定されたそれではなく、企ての時間性から逃れ出た一点を指すものと理解すべきであろう。『ニーチェについて』においては、この現在の一点を指す用語が未だバタイユの中で定まっていないが、これは後に「瞬間 (instant)」という言葉で定着していくことになる。以下は『至高性 (*La souveraineté*)』からの引用である。「至高者は生産活動のうちの超過する部分、すなわち生産活動がそのような、後に来るはずの時の優位性に人が服従した事によって、そしてまさに服従した程度に応じて獲得された過剰な部分を、現在時 (le temps présent) の優位性に戻すのである。至高者は主体の本質を要約しており、その者のおかげで、またその者にとっては、瞬間 (instant) が——あの奇蹟的な瞬間が——いわば大海となるような存在なのだ。つまり、労働の諸々の河流がそこへと流れ込み、そこで解消されるような大海となる存在なのだ」(*La souveraineté*, OC, VIII, pp.285. [湯浅博雄、中地義和、酒井健訳、『至高性』、人文書院、1990年、78頁。])。だいたい圧縮された記述となっているが、ここで言う「至高者」とは労働することがなく、消費する者 (例えば王) であり、有用性を越えた彼岸に位置する者である。蓄積された力はこの至高者において苛烈に消費される。また、『ニーチェについて』が書かれる以前、『内的体験』においては、「蝶番から外れた時間 (le temps sorti des gonds)」(EI, OC, V, p. 89. [邦語訳、176頁。]) とも表現されている。

- 21) SN, OC, VI, p.167. [同、290頁。]
 22) SN, OC, VI, p.57. [同、99頁。]
 23) 「この未来への気遣いがもはやわれわれに関係がなくなってしまうような状態は、人間の上に、あるいは人間の下に存するのである」(SN, OC, VI, p.54. [同、91-92頁。])
 24) SN, OC, VI, p.58. [同、100頁。] また、この引用文中にある、「われわれを解体する欲望 (désir)」という言葉に関して、付言しておきたい。この欲望は断片化した状態——個人性の殻を破って「交流=コミュニケーション (communication)」の契機を促すものでもある。コ

ジェーヴのヘーゲル講義にて多大な影響を受けたバタイユであったが、そのコジェーヴがヘーゲルを読み解く際に重要なタームと目していたのは、自己意識の核としての「欲望」である。そして、ヘーゲルの哲学を歴史の展開として、つまり時間として強調した読解も併せて想起するならば、バタイユにおいて欲望と時間がある程度高い密度で結び付けられているものであろうことが推測されるであろう。時間の問題はコミュニケーションの問題にも連続している。これらを架橋するであろうバタイユの欲望論については稿を改めて検討したい。また、これとかかわって興味深いのは、ルソーの『エミール』における「欲望」と「時間」に対するそれぞれの言及である。ルソーが「不確実な未来のために現在を犠牲にする (sacrifier le présent à un avenir incertain) 残酷な教育」(Rousseau, J.-J. *Émile ou de l'éducation*, Garnier Frères, 1957, p.63.) というとき、バタイユとその語り口は似ているものの、彼が糾弾している実質のところは教育が子どもに与える不毛な苦しみである。ルソーは、子どもを無闇に苦しめることはその子の将来役に立つどころか、むしろ害になると考えている。この点、教育における現在時の批判を行なっているものの、依然として企ての形式を維持したままであるように見受けられる。ところで、ルソーが人間の不幸を「欲望と能力の不均衡」(ibid.) のうちに見出し、その不幸に陥らないように両者が釣合った自然な状態を志向するべきと述べる時、欲望の過剰を抑えるという意味では、これもバタイユとはその方向性を異にしているようにも考えられる。しかし、注意深くその述べるところを追えば、抑えるように言われている欲望とは、自然を越えるもの——企てを連鎖させる自己意識の核となる欲望である。これらの点を合わせて考慮すれば、ルソーの「欲望」ないし「時間」を教育において結びつけるとき、彼は単に近代教育批判の対象として位置付けられるに留まらない研究対象であるだろう。これもバタイユの欲望論と併せて検討したい。

25) *Le coupable*, OC, V, p.250. [出口裕弘訳、『有罪者』、現代思潮社、1975年、30頁。]